著者プロフィール

片山由美子（かたやま・ゆみこ）

昭和27年7月17日、千葉県生まれ。同54年、鷹羽狩行の指導を受け作句を始める。翌年「狩」入会。平成2年、第5回俳句研究賞、同19年、「俳句を読むということ」（平18）で俳人協会評論賞を受賞。
句集に、「雨の歌」（昭59）、『水精』（平元）、「天弓」（平7）、「風待月」（平16）、「片山由美子句集」（平10）、「季語別片山由美子句集」（平14）。著書に、評論集「現代俳句との対話」（平5）、「定本　現代俳句女流百人」（平11）、対談集「俳句の生まれる場所」（平7）、エッセイ集『鳥のように風のように』（平10）入門書「今日から俳句―はじめの一歩から上達まで」（平24）などがある。「狩」副主宰。俳人協会理事。日本文藝家協会会員。青山学院女子短大非常勤講師。

〈句集『香雨』より転載〉〈2012年7月17日時点〉

『香　雨』（自選15句）

片山由美子

あけぼのや春の音とは水の音
断崖をもつて果てたる花野かな
朝顔の種採りはじめ採り尽す
消ゆるためかたちとなりぬ浮氷
書斎へと子規忌の客を通しけり
柊の花のましろき香と思ふ
水音のかがやくごとし根白草
やはらかく胸を打ちたる団扇かな
聞きとめしことまなざしに初音かな
雨の日の午後しづかなる桜餅
手紙よく書きたるむかし青葉木菟
ここはもう花野といへぬ花の数
日傘たたむ日傘に視線感じつつ
照らし合ふことなき星や星月夜
命あるものは沈みて冬の水